2024年1月14日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

晴れの日は終わらない

［ヨハネによる福音書2章1～11節］

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

[1]　私たちの世界の現実

一週間前の日曜日は、前牧師加藤享先生の告別式、また、その翌日には既に主の許に帰っておられた喜美子夫人と共に教会の墓地での納骨式も執り行わせて頂きました。少し目まぐるしく時間が過ぎて行きましたけれども、きっとこれから、淋しさが募ってゆくのではないかな、と思っています。ご子息の加藤誠先生が、川越教会の皆様には本当に色々と助けて頂いて感謝します、と仰って下さっていました。今日の週報の「コラム」欄に、誠先生が私たち川越教会の者に向けて文章を寄せて下さいましたので、是非お読みください。

今年になってまだほんの2週間しか経っていないのですけれども、今年はまずマグニチュード7.6とも言われる能登半島地震（その土地では1885年以来最大）から一年が始まりました。お正月の元旦でした。夕方ののんびりしたお正月気分はかき消されました。緊迫感と、現地に対する心配もですが、私たちの日常そのものが果たして大丈夫なんだろうか…という暗い影のようなもの、不安な心が忍び寄ってくるものを感じました。そして翌日には、羽田空港で、考えられないような衝突事故も起こりました。今年はどのような年なのでしょうか…。しかし、私たちは、そのような現実（それこそ私たちの「生と死」を考えさせられる）を突きつけられる中にあっても、神様は、生ける神様として、この現実の中におられ、この現実を痛んでおられる、そして私たちと共に、様々なことが起こって来る日常を共に歩んで下さるのだ、ということを信じて進んで行きたいと思います。

[2] ガリラヤのカナの婚礼の中で

今日私たちに与えられている聖書箇所はヨハネ福音書の2章1～11節です。ここにはイエス様がなさった最初の奇跡物語が記されています。それはガリラヤのカナで行われていた婚礼の場所で、想定外に、用意していたぶどう酒が底を尽きそうになった時、舞台裏にいたイエス様が、召使いたちに沢山入る水がめ一杯に水を汲ませ、それをその婚礼の世話役の所に持ってゆくと、それが芳醇なぶどう酒に代わっていた、という奇跡物語です。私はとてもこの時に相応しい聖書箇所だと思いました。私たちの人生と重なり合うものを感じます。私たちは色々な予期しない出来事に見舞われることがある、それは、結婚式やお正月のような皆が晴れ晴れと「おめでとう」と言い合うような平和な空気は、実はとても表面的な事なのかも知れない…と思わせる現実が起こってくる。この物語のお祝いの裏側では知らない内にぶどう酒がどんどん消えて行くように、私たちの足元は本当は不安定なのではないだろうか、ということを考えさせられるからです。

しかし聖書は私たちに、お前たちの未来は暗いと言っているのではありません。逆です。あなたの知らないところでイエス様があなたを支えて下さる、私たちの人生は、味気ない「水」で終わるのではなく、良いぶどう酒がしたたるような命の祝福、命の完成を用意して下さっているのです、と告げていると思います。

この「カナの婚礼」の奇跡物語を、小説の重要な部分に取り込んだのがドストエフスキーです。『カラマーゾフの兄弟』の主人公アリョーシャが、自分が心から敬っていたロシア正教の主教ゾシマ長老が死んでしまって落ち込んでいるのですね。しかもその遺体は、聖人のように思っていたのに、腐臭を発し始めている。アリョーシャは、まるで、ひどい罪人のような仕打ちではないか、こんなバカな！と思って混乱している。しかし、これが目の前の現実です。その時アリョーシャは、ゾシマ長老の棺がある礼拝堂の中でこのカナの婚礼の箇所が読まれているのを聞き、そしてあることに気付かされるのです。少し紹介させて頂くとこうです。

―「三日目にガリラヤのカナに婚礼があってイエスの母がそこにいた。イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた。ぶどう酒がなくなったので、母はイエスに言った。『ぶどう酒がなくなってしまいました…』という言葉がアリョーシャに聞こえた。『この箇所は好きだな。これはガリラヤのカナだ、最初の奇跡だ。ああ、愛すべきこの奇跡！**キリストが訪れたのは、悲しみの場所ではなく、人間の喜びであり、はじめて奇跡を行って人間の喜びに力を貸したのだ**…。「人を愛する者は、人の喜びも愛する」。これは亡くなった長老が絶えず繰り返していた言葉だ、あの人の一番主要な考えの一つだった。』彼は夢うつつになるのですね。『それにしても、これは何だ、どうしたのだ？まさかあの方（ゾシマ長老）もここに？あの方は柩の中のはずでは…でも、ここにも来ておられるんだ…立ちあがって、僕を見つけた。こっちへ歩いてくる…ああ！』アリョーシャの方へ、顔に小皺の一面によった枯れた老人が、静かにほほえみながら、嬉しそうに歩みよってきた。『そう、呼ばれたのだよ、招かれたのだ。恐がることはない。**我々に比べれば、あのお方（イエス)はその偉大さゆえに恐ろしく思えもするが、しかし限りなく慈悲深いお方なのだ。愛ゆえに我々と同じ姿になられ、我々と共に楽しんでおられる。客人たちの喜びを打ち切らせぬよう、水をぶどう酒に変え、新しい客を待っておられるのだ。たえず新しい客をよび招かれ、それはもはや永遠になのだ。ほら、新しいぶどう酒が運ばれてくる。見えるか、新しい器が運ばれてくるではないか……**』。何かがアリョーシャの心の中で燃え、何かがふいに痛いほど心を充たし、歓喜の涙が魂からほとばしった…彼は両手を広げ、叫び声をあげて、目をさました…。**彼はすべてに対してあらゆる人を赦したいと思い、自らも許しを乞いたかった。ああ、だがそれは自分のためにではなく、あらゆる人、すべてのもの、いっさいのことに対して赦しを乞うのだ。『僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる』。**アリョーシャは外に出た。彼の頭上には、静かに輝く星たちをいっぱいに満たした天蓋が広々と、果てしなく広がっていた。アリョーシャは立ったまま星空を眺めていたが、ふいになぎ倒されたように大地に倒れ込んだ。『おまえの喜びの涙を大地に注ぎ、おまえのその涙を愛しなさい…』彼の心の中でその言葉が響き渡った。そう、彼は喜びに我を忘れて泣いたのだ。大地にひれ伏した彼はか弱い青年であったが、立ち上がった時には一生変わらぬ堅固な闘士になっていた。3日後、アリョーシャは修道院を出たが、それは、今はなき長老が命じた「俗世で生きるがよい」との言葉にも適っていた。」

―次から次にぶどう酒が運ばれてくる幻（夢）を彼は見て、大いなるものに彼は赦しを乞うた、と言うのですね。合理的な説明がつくようなことではありません。しかし、もしかしたら、神様に圧倒される、神様に打たれるということはそのようなことではないでしょうか。そしてそこに、生かされている喜び、赦されている有難さが自分を取り囲んでいるのを知るのです。

[3] 「あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」

『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャは、俗世で生きることを決意しました。これも象徴的です。「カナの婚礼」、「結婚式」というのは、大きな喜びでもありますが、具体的な俗っぽい二人の生活が始まったということでもあります。そこには期待を裏切られることもあれば、思いがけず傷つけ合うこともあります。一緒にいても最期はどちらかがどちらかを見送ります。「ぶどう酒が消えて行くような感覚が襲ってくるような連続ではないかと思います。母マリアは言いました。「ぶどう酒がなくなりました」。イエス様は「わたしの時はまだ来ていません」と言われました。そう、完全な救いの時・十字架の時にはまだ早いのです。しかしイエス様は救いのしるしをここで見せて下さいました。それは水をぶどう酒に変えられた奇跡。宴会の世話役はいみじくも花婿を誉めて言いました。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」―花婿はこれを知らなかったのです。“知らない間に”彼の人生は支えられ、祝福されていたのです。イエス様によって！

実は、私たちも皆そうなのです。私たちが今日このようにあるのは、私たちのために失いかけたぶどう酒を与え続けようとして下さるイエスとそれに奉仕する者がいて下さるおかげではないかと思うのです。私たちの人生の喜びの灯を、「晴れの日」を決して段々と暗くなるようにはしない方、むしろ私たちがどんな俗っぽい人生の四季の山坂を通っても、そこをカサカサの場所にせずに、詩編23編にあるように杯あふれる場所とし、最後は「わが許に来たれ」と天上の宴をもって迎えて下さるお方が、実は私たちの人生の舞台裏にいて下さる！のです。

11節。「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた」。私たちの人生がしぼまないように、絶望で終わらないように主ご自身が奉仕をされる、それが主の「栄光」だと言っています。何と素晴らしいことか！と思います。そのために主は十字架でその血潮を注ぎ尽くして下さったのです。それを私たちは主の晩餐式でも頂いています。あのぶどう酒（液）には、主の栄光が注がれ、それを私たちは飲んでいます。でも、それは毎日そうなんです。わたしたちの日々の現実の中で、イエス様は絶えず水をぶどう酒に変えて下さっているお方なのです。弟子たちがこの出来事を通してイエス様への信仰を固くしたように、この出来事を私たちの人生と重ね合わせて味わってみたいと思います。　お祈り致します。

水をぶどう酒に変えることが出来る主なる神様、私たちの人生が空しくならないようにあなたは私たちの実感さえ超えて、絶えず恵みを注いでいて下さいます。目が見えず罪深き者ですが、あなたを信じ、あなたに全くお委ねする信仰をこの一年も与え、お守り下さい。主イエス様のお名前によって。アーメン。